

## 第1節 資料館における展示・情報公開活動

### 1. 第37回企画展『水が残した物質文化～構内遺跡出土の木製品～』

他の考古系博物館でも同様であるが、当館ではこれまで「土器」を主体とする展示を開催してきた。これは、遺跡からの遺物としては土器が圧倒的に豊富であることや、短期間で形態を変化させることから、時の移り変わりを可視化させやすい、などの理由による。

その一方で、特に本学吉田構内(吉田遺跡)は、東から南を山に囲まれ、丘陵地と平地部にまたがり立地することから、埋没谷や埋没河川が数多く存在しており、地中で分解され消滅する可能性が低い木製品が、そのままの形状で遺存しやすい環境にある。この10年ばかりの間に、数百点もの木製品が出土しているのも、この環境に負う部分が大きい。そこで平成28年度の企画展では、弥生時代から室町時代までの木製品を集中的に公開することにした。

展示では、近年吉田構内西部の陸上競技場から出土した弥生時代の竹製網代編み製品や、吉田構内南東部の動物医療センター周域に存在する古代の埋没谷から、平成18年度以降継続的に出土している多量の木製品(掘立柱建物の柱根、杭、斧柄、剝物、曲物、火付け木など)、吉田構内北部の就職支援施設「O-HARA」にて検出された井戸より出土した曲物柄杓など45点もの木製品を公開した。

同時に、これらの展示品が保存処理を終えて安定した状態に保たれている一方で、出土以降保存処理が行えていない木製品が水漬け状態で多数保管されていることや、予算の問題で「年間保存処理数」<「年間出土数」となっていること、保存処理待ち木製品がすでに約400点(※当時)存在していること、資料の劣化が進行していることなど、包み隠すことなく実情を公開した。

当館の木製品保存処理数は、平均で年間20～30点である。計算上、これ以上の出土がなく、継続的に処理できたとしても完了に15～20年が必要となる。当館の保存処理予算を増加させつつ埋没谷や埋没河川上での開発を避けるなど、全学的な対応が必要不可欠と思われるが、方針は未だ提示されていない。幸運にも形を残した古代の木製品を継承する責任から目を背けてはならないと考える。

7月25日(月)から10月14日(金)までの会期中、559名の方々にご覧いただき、観覧者からは「木の利用は大昔からあったようで、古いようで新しい気がする」「今回の展示ははじめてでは？ 今後いろいろな企画をお願いします」などの声が寄せられた。



写真1 企画展ポスター



写真2 展示の様様

## 2. 山口県大学ML連携特別展『学びはぐくむ～モノから学ぶ歴史教科書～』

参加館が共通テーマに沿って各大学や館の特性を生かした学術資料または研究成果の展示を開催するという現行体制での4年目を迎えた山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携特別展。平成28年度の共通テーマは「はぐくむ」に決定された。

本学からは、当館と総合図書館、医学部図書館、工学部図書館の4館が参加をしており、毎年本学共通の展示タイトルを定めている。当該年度は「学び はぐくむ」が共通タイトルとなったことを受け、当館では歴史教科書を素材とする企画を実施することにした。

現在、日本の学制は6・3・3・4制を採用している。日本の歴史については、初等教育の末年である小学6年生から学び始め、前期中等教育をおこなう中学校でやや詳細に学ぶものの、後期中等教育をおこなう高等学校では必修科目中の選択科目となるため、全ての高校生が学ぶ科目とはなっていない。さらに極めて限られた期間で悠久の列島人類史を学ばなくてはならないことから、初・中等教育ではどうしても「日本史＝教科書の暗記」になりがちである。

展示では、考古学の研究成果が大きく反映する先史時代から古代にかけての現行歴史教科書(小・中学校、高等学校)の記述を確認するとともに、吉田遺跡から出土した遺物を用いて教科書記述の検証を行った。具体的には「教科書記述の根拠となる実物資料」「実物資料から見た教科書記述への疑問」「教科書記述から実物資料が識別可能か」という視点から展示を構築した。

平成28年10月29日(土)から平成29年1月31日(火)の会期中、561名もの方々に見学いただいた。観覧者からは「大学らしい展示で楽しかった」「普通の博物館では踏み込めないテーマだった」などの声が数多く寄せられた。特に「中等教育の日本史学習で本当に縄文土器と弥生土器が見分けられるか」というコーナーは好評で、「見分けられない」ことに驚く姿が印象的であった。

また、展示では古代の学習帳とも言えるべき「千字文音義木簡(本書付篇1(192～200頁参照))」の実物初公開もおこなった。それにあわせ、10月30日(日)に開催された姫山祭(吉田キャンパス大学祭)にて、吉田遺跡出土品をもとに復元した円面硯にて墨を擦り、木板に文字を書く「木簡ワークショップ」(参加者20名)と、古代の墨づくりの実演をおこなったほか、11月12日(土)にミュージアムトーク(参加者12名)を開催し、いずれも好評を博した。



写真3 ミュージアムトークの様様



写真4 ワークショップの様様

### 3. 第5回山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

平成24年度より、山口大学学術資産継承事業委員会（以下委員会と記述）が主催する事業成果展『宝山の一角』の共催館として、展示空間の提供と展示設営協力、会期中の管理運営を行っている。

展示は例年どおり前期・後期の2部構成で、前期展は山口商工会議所主催「山口お宝展」への参加企画も兼ね平成29年2月25日（土）から4月21日（金）まで、後期展は5月8日（月）から6月30日（金）までの会期で開催された。

当館は共催館として展示会場の管理を行うと同時に、前期展にて見島ジーコンボ古墳群（山口県萩市所在）出土資料を出展することとなった。

前期展では、文書資料として西山塾及び大楽源太郎資料（図書館）、地震と断層に関連する鉱物・岩石資料（理学部）、美術資料として植木未魚子作品（教育学部）、商品資料として山口焼（経済学部）が、後期展では文書資料として近現代東アジア関連資料（経済学部）、考古資料として立野経塚（山口県光市所在）出土経筒、鉱物資料として新鉱物と稀産鉱物（工学部）、生物標本資料としてニホンザルの交連骨格標本（共同獣医学部）、シロアリと秋吉台の昆虫（農学部）が展示された。

前後期ともミュージアムトーク（展示解説）を開催したが、特に後期展のトークは所蔵学部の教員や大学院生が解説を行ったこともあり、参加者も多く（12名）、熱気溢れる会になった。

前期展では720名、後期展では565名、総数1,285名もの方々に観覧いただいた。観覧者からは「貴重なコレクションの公開展示を続けて欲しい」「昔の資料の散逸を危惧しており、個人の所蔵を1ヶ所に集めて管理していく必要を感じた」「山口大学がお持ちの埋文資料を時代別にシリーズで見たい」などの声が寄せられた。

『宝山の一角』展は、本学が教育研究に活用する資料を分かりやすく紹介していることもあり、新入生のガイダンスや授業の課題として活用されることが年を追って多くなっている。本学の特色ある行事として継続するよう、当館としては今後も協力を惜しまない所存であるが、同時に「資料の保存・管理・継承」という博物館の一次機能を基幹業務とする組織として、委員会の活動を支援するとともに、適切な助言等を与えられるよう努力していきたい。

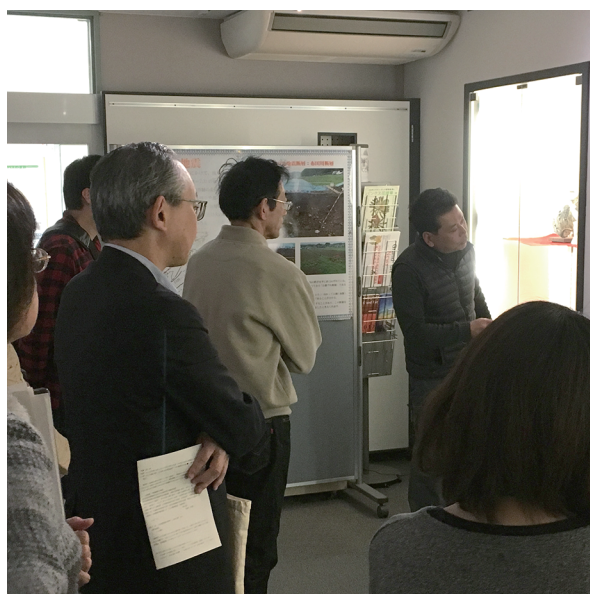


写真5 前期ミュージアムトークの様様



写真6 後期ミュージアムトークの様様

#### 4. 平成28年度刊行物

##### 1. 『山口大学構内遺跡調査研究年報XX』

当年報は埋蔵文化財資料館設立以来、平成14年度まで刊行したシリーズである。前年度に刊行した平成13年度年報に続き、平成28年度は平成12年に実施した構内遺跡調査報告を所収した年報を刊行した。事前調査1件(吉田)、試掘調査2件(吉田1・常盤1)、立会調査12件(吉田9・白石1・光2)の成果が掲載されている。そのほか、田畑直彦による「吉田遺跡第I地区B区の未報告図面について」と題する付篇を所収している。

事前調査1件は、吉田構内総合研究等新営に伴う調査であり、弥生時代から古代の遺物を包含する埋没谷が確認されており、円面硯や製塩土器、弥生時代中期末から後期初頭の弥生土器や打製石鏃、磨製石器などの出土が報告されている。

##### 2. 館蔵資料調査研究報告書6『見島ジーコンボ古墳群第123号墳・第152号墳(再)・西部域出土資料調査報告』

平成22年度から開始した事業で、継続的に見島ジーコンボ古墳群の出土資料調査及び報告書の刊行を実施してきた。平成28年度は、古墳群西部域調査の最終年度であり、第123号墳が調査対象であったが、当館所蔵品に新たに第152号墳出土と目される資料群が確認されたことから、第152号墳出土資料の再調査(接合検討)も実施することとなった。

平成28年5月16日から6月3日にかけて、第123号墳と第152号墳を対象に、当館と萩博物館の収蔵資料の悉皆調査を実施し、その成果を収録した。また、昭和35年(1960)に実施された分布調査にて採取されたと推定される当館所蔵古墳群西部域資料の調査成果も公開した。

##### 3. 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第26号『てらこや埋文』

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌であり、当初季刊で刊行していたが、平成23年度以降は年度末に1度の刊行となっている。巻頭頁は当該年度に実施した吉田構内動物病理解剖実習棟の調査成果速報を、2頁から3頁には展示活動、4頁から5頁には山口県立山口博物館との共済事業などを、6頁にはワークショップ関連記事を、7頁には「資料館この一品」として「千字文」音義木簡を掲載した。

当広報誌は当館をはじめ県内博物館施設で無料配布しており、県立図書館などにも収蔵されている。

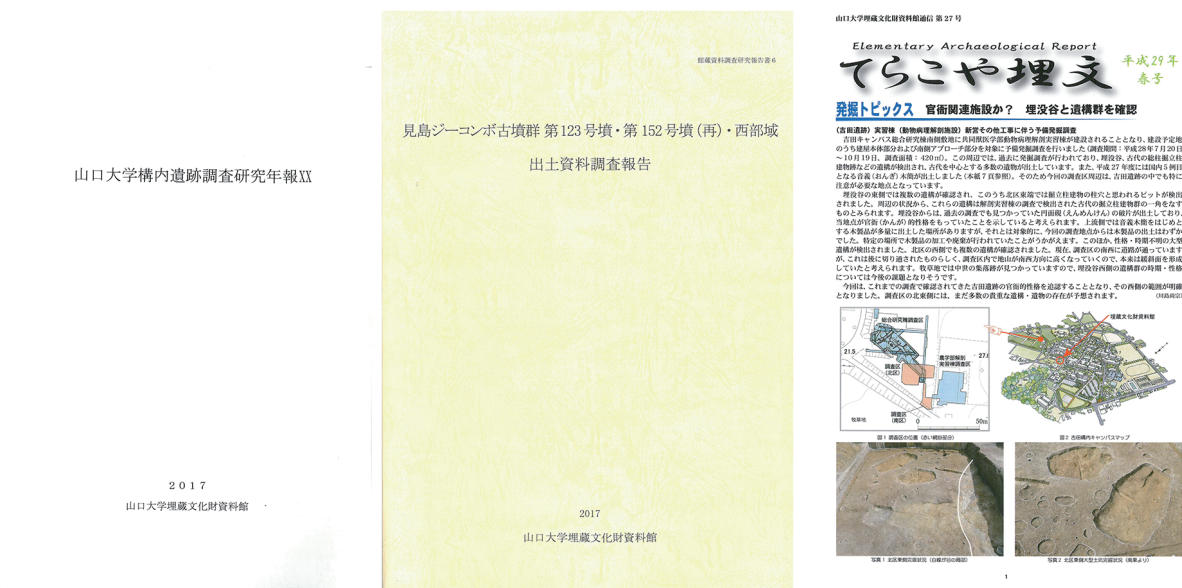


写真7 平成28年度埋蔵文化財資料館刊行物